

## 武蔵野日曜講筵 復活節

## 復活の力

―ルカ伝第24章1～12、33～49節―

1987年4月19日

小池辰雄

神の相に即して 神かれ（エノク）を取りたまひければおらずなりき エリヤは大風にのりて  
天に昇れり その子の魂中にかえりて生きたり エリシヤの骨にふるるや生きかえりて起きあ  
がれり キリストの甦りは極めて当然 わが霊を受けよ（詩）復活の力 死は乗り越えられ  
た事実 キリストの復活は熾んなる霊生の顕現

## 【ルカ24】

1 一週ひとまわりの初はじめの日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。2 然しかるに石の既に墓より転まろばし除のけあるを見、3 内に入りたるに、主イエスの屍しかばね体を見ず、4 これが為ために狼狽うろたえおりに、視よ、輝ける衣を著きたる二人の人その傍かたわらに立てり。5 女たち懼おそれて面おもてを地に伏せれば、その二人の者ひという『なんぞ死しにし者ものの中に生ける者を尋ぬるか。6 彼は此こ処こに在いまさず、甦よみがえり給たまえり。尚なほガリラヤに居給たまえるとき、如何いかに語り給たまいしかを憶おもい出いでよ。7 即すなはち「人の子は必ず罪ある人の手に付わたされ、十字架につけられ、かつ三日めに甦よみがえるべし」と言い給たまえり』8 ここに彼らその御言を憶おもい出いで、9 墓より歸りて、凡て此等ことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。10 この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。11 使徒たちは其の言を妄語たわごとと思おもいて信ぜず。12 「ペテロは起たちて墓に走りゆき、屈かがみて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ歸れり」……

33 かくて直ちに立ちエルサレムに歸りて見れば、十一弟子および之ともと偕ともなる者もまた途みちにて有ありし事と、パンを擘さき給たまうによりてイエスを認めし事とを述ぶ。36 此等ことを語る程に、イエスその中に立ち「『平安なんじらに在れ』  
と言いい」給たまう。37 かれら怖おそじ懼おそれて、見る所のものを霊ならんと思おもいしに、  
38 イエス言い給たまう『なんじら何ぞ心騒うたがぐか、何ゆえ心に疑惑うたがおこるか、39 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫なでて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』40 「斯く言いて手と足を示し給たまう」41 かれら



歡喜よろこびの余あまりに信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処こゝに何か食物あるか』<sup>42</sup>かれら炙あぶりたる魚ひしぎれ一片を捧げたれば、<sup>43</sup>之を取り、その前まへにて食し給えり。  
<sup>44</sup>また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕ともに在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所なり』<sup>45</sup>ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、<sup>46</sup>『かく録しるされたり、キリストは苦難くるしみを受けて、三日めに死人の中より甦よみがえり、<sup>47</sup>且その名によりて罪の赦ゆるしを得さする悔改くひあらためはエルサレムより始まりて、もろもろの国人のべつたに宣伝のべつたえらるべしと。<sup>48</sup>汝らは此等のことの証人なり。<sup>49</sup>視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力ちからを著ませらるるまでは都に留まれ』

### ● 神の相に即して

ご遠方からもよくいらつしやつてくださいました。1941年の春から今回まで47回くらいになりますかな。復活節を47回やって、まだ語らないところがあるかと思うと、まずないわけですね。ところが、今度はあつたんです。それで今日は未だかつてないお話にしろかと思ひますが。

私は木曜からほとんど断食している。しかし、非常に魂の世界は明るくなつております。「復活」と言ひましても、「甦よみがえり」という言葉は私はあまり好きではないけれども、まあ仕方がない、そう使っているものだから。「黄泉よみから帰る」なんていうのはね。大体、黄泉になんかに行く必要は本当はないんだけども。

創世記1章27節に、

「人間は神の似姿つうざに創造つくられている」

という。「似姿」という訳もあまり感心しないんですが。

「神すがたの相すがたに即して」

と、こう訳すべきだと思つている。即ち、神さまは偶像でないですから、無相です。このことは『無の神学』にも書きました。

神さまの相は無相むさうの相さうなんです。相無相むさう。この無相の相に即して造られたのだから、人間も本質は無相の相であるわけです。我々はみな相対的なかたちを持つていますけれども、本当の姿は見えない。本当の姿が見えない、そこに本当の生命がある。だから、神に即して造られた人間は、本当は死なないわけです。ところが、残念ながら、アダム・イブの物語にあるとおりに樂園喪失になつてしまった。そこで、死しなざるをえないことになつた。万人は死という宿命をみんな持つてゐる。



●神かれ（エノク）を取りたまひければおらずなりき

ところが、この無相の相に即して生きたひとがある。これはご承知のとおり、エノクです。創世記5章21節。復活をそこから語りだすというのは、私は今日が初めてです。

「<sup>21</sup>エノク六十五歳に及びてメトセラを生めり。<sup>22</sup>エノク、メトセラを生みし後三百年神とともに歩み男子女子を生めり。」

という。凄いな、これは。おもしろいな、<sup>365</sup>年生き長らえて、男子女子を生んだというのだから、大変なひとだ。

<sup>23</sup>エノクの齡は都合二百六十五歳なりき。<sup>24</sup>エノク神と偕に歩みしが神かれを

取りたまひければおらずなりき。」（創世記5・21～24）

と。これはまた大変な記事です。輝かしい記事です。

「何歳にして死ねり、死ねり」

とさんざん書いてあるなかで、ここだけは「死ねり」と書いてない。30年間神と共に歩んで、そして見えなくなりました。神さまはエノクを死を経ずして連れていってしまった。だから、ここは

「居らずなりき」

と書いてある。この「居らずなりき」という字が正に「無」という字なんです。無相の相になって、その通り行ってしまった。こういう極めて例外であるが、しかし、樂園喪失以後にも、本当に神と共に歩めば、死を見ずして行ってしまおうという可能性を実現したわけです。

●エリヤは大風にのりて天に昇れり

もう一人いた。それは、ご承知のとおり、エリヤですね。これは列王記略上から下にむかって書いてある。列王記略下の2章に、

「<sup>1</sup>エホバ大風をもてエリヤを天に昇らしめんとしたもう時

ここに「大風をもてエリヤを天に昇らしめんとしたもう」とちゃんと書いてある。

エリヤはエリシヤとともに

ここに「エリシヤ」とあるが、これは「エリシヤ」です、ヘブライ語でも「エリシヤ」という。

ギルガルより出で往けり。

「ギルガル」というのは二カ所ありますが、ヨルダンの流れの死海に注ぐちよつと手前にギルガルという所があります。

<sup>2</sup>エリヤ、エリシヤにいいけるは、請うここに止まれ、エホバわれをベテルに遣わしたもうなりと。エリシヤいいけるは、エホバは活く汝の靈魂は活く

この、



「エホバは活く汝の靈魂は活く」というのは誓いの言葉なんです。

「絶対にこれから言うことは、私は自分の言葉に背かない」と言うときに、「エホバは活く汝の靈魂は活く」という言い方をする。

我なんじをはなれじと。

「どんなことがあっても、先生を離れません」と、エリシヤはしがみつくわけです。

彼等ついにベテルに下れり。ベテルに在る預言者の徒

「預言者の徒」というのは、選びの預言者というのには必ず単独です。神さまから単独に選ばれる。そのまたお弟子さんたちがこの預言者の群になる。それが「預言者の群」ということです。

エリシヤの許に出でいたりて之にいいけるは、云々。」

と。要するに、エリシヤがどこまでもエリヤについて行きまして、そして7節、

7 預言者の徒 五十人ゆきて遙に立ちて望めり。彼ら二人はヨルダンの浜に立ちけるが、

ヨルダンの川辺に立つたんです。

8 エリヤその外套をとりて之を巻き水をうちけるにこなたとかなたにわかれたれば、

水が、ちょうど紅海みたいだね、あれがそうだよな、モーセの跡を継いだところのヨシュアがヨルダンを渡るときに、神の箱をかついで行ったら、「水が分かれた」と書いてあるでしょ。あれと同じような具合にね。

二人は乾ける土の上をわたれり。渉りける時エリヤ、エリシヤにいいけるは、我が取られてなんじを離るる前に汝わが汝になすべきことを求めよ。エリシヤいいけるは、なんじの靈の二つの分の我におらんことを願う。

靈の分けた一つを頂きたいと言う。実は彼は全部をもらってしまった。「二つの分」というのは、分け方のときに、昔は少し多いのと小さいのと分けたいらしい。

10 エリヤいいけるは、汝難き事を求む汝もしわが取られてなんじを離るるを見ばこの事なんじにならん。しからずば此事なんじにならじ。

即ち、生きているうちは、ここに居るうちはダメだと、不思議なことを言った。

11 彼ら進みながら語れる時、火の車と火の馬あらわれて二人を隔てたり。

エリヤは火の預言者ですから、バアルの預言者450人を相手に、神さまが火を下すことを祈った。バアルの神に祈ったのは、さっぱり火が下りてこない。朝から晩まで祈ってもダメなんだ。ところが、エリヤが祈ったらば、たちどころに神さまの火が下りてきて、薪を焼いたというでしょ。エリヤは勝った。だから、この

「火の車と火の馬」



要するに、火が車のような形をしたり、馬のような形をしたりして現れてきたわけです。エリヤは大風にのりて天に昇れり。

### 12 エリシヤ見て、わが父わが父

キリストが神さまのことを「父」と言いましたが、このエリシヤはこの先生のことを「わが父」と言った。

イスラエルの兵車よその騎兵よと叫びしが、再びかれを見ざりき。」(列王記略 下2:1～12)

ところが、エリシヤの弟子どもが、

「いや、どこかに居るはずだ。捜させてくれ」

なんて言った。

「バカ言うな」

と。けれども、あまり言うものですから、

「では、捜してみろ」

と言ったところが、ついに見つからなかったということがその後に書いてある。結局、エリヤは天界に行ってしまった。

即ち、このエノクとエリヤは、死を見ずして天に往ってしまった。人間は本来、そのようなもの。いわんや、イエスが天界に行らっしゃれることはもう当然なことなんです。イエスは仕方がない。これは十字架という、贖罪という大業を果たさなければならなかったから。キリストが甦ることは、必ず現れることは、今までの地上の姿よりもっと凄い姿になることは、キリストはちゃんと知っておられた。だから、預言された。ところが、ペテロまでも躓いてしまって、へんだと思った。まあ、そんなわけですよ。

### ●その子の魂中にかえりて生きたり

エリヤという預言者が死人を甦らせた。そのことは列王記略上の17章。エリヤはバアルの預言者たちと戦って勝ったけれども、アハブの妃が、バアルをアハブに拝ませるようにしたイザベルが非常にエリヤを憎んで殺そうとした。それで、エリヤは逃げて行った。

「ギレアドに住れるテシベ人エリヤ、アハブに言う吾事わがつかうるイスラエルの神は活くわが言なき時は数年雨露あらざるべしと。……」

これはエリヤの預言のとおりになる。エリヤは鳥が運んでくる食べ物でもって、水を飲んだりそのパンを食べたりして暮らしていたことがそこに書いてありますが。

8 エホバの言彼に臨みて曰く、<sup>い</sup>起ちてシドンに属するザレパテに往きて其処そこに住め、

これはペリシテの方の所ですよ。



「お前はアハブ王の勢力の中には危ないから、異邦に逃げていろ」というわけです。

視よ我彼処かしこのやもめおんなに命じて爾なんじを養わしむと。10 彼起ちてザレパテに往けるが邑まちの門に至れる時、一人のやもめおんなの其処そこに薪ひろを採うを見たり。すなわち之を呼びて曰けるは、請う器すこしに少許すこしの水を我に携来りて我に飲ませよと。11 彼之を携きたらんとて往ける時、エリヤ彼を呼びて言いけるは、請う爾なんじの手に一口のパンを我に取りきたれと。

パンと水が欲しいわけだ。エリヤもすっかり断食を余儀なくされてしまっているからね。

12 彼いいけるは爾なんじの神エホバは活く我はパン無し、ただ桶おけに一握ひとつかみの粉こなと瓶びんに少許すこしの油あるのみ。

少しの麦粉と油があるだけだと。

視よ我は二つの薪ひろを採う。我いりてわれとわが子のために調理しとて之をくらいて死なんとす。

もう飢え死にしようなところだと。ところが、神さまはこういう女の所にエリヤを遣わしたの、エリヤをしてこの女を助けんがためだったんです。

13 エリヤ彼に言う、懼おそるるなかれ往きて汝がいえる如くせよ。但し先ず其をもてわが為に小さきパン一つを作りて我に携きたりその後爾なんじのためと爾の子のために作るべし。14 そはエホバの雨を地の面に降したもう日まではその桶おけの粉は竭つきずその瓶びんの油は絶えずとイスラエルの神エホバ言いたまえばなりと。15 彼ゆきてエリヤの言えるごとくなし、彼とその家及びエリヤ久しく食らえり。16 エホバのエリヤに由りて言いたまいし言のごとく桶の粉は竭つきず瓶の油は絶えずぎりぎりき。

という不思議なことが起きてきた。これはエリヤの神さまへの祈りによつて、雨がくだつてきたり、それが普通の物理現象でなくて、増えてしまった。それで助かったということを書いてある。これが

### 「不尽の油」

という、尽きない油という有名なお話なんです。「カナの婚宴」の時にキリストが水を葡萄酒に変えましたが、このエリヤのこの奇蹟はまたちよつとそれに劣らないところの凄いことが起きているわけです。

17 これらの事後、その家の主母あるじなる婦おんなの子疾やまいに罹りしがその病甚はなはだ劇げきくして氣息いきその中に絶えて無なきに至れり。18 婦エリヤに言いけるは、神の人よ、

もうこれは「神の人」と言うわけですね。エリヤも「神の人よ」と言われています。

なんぞ吾事わがことに關涉たずさわるべけんや。汝はわが罪を憶おもい出さしめんため又わが子を死なしめんために我に来れるか。



と言って、非常に懼れたわけだ。何かこの女は悪いことをしたかなんか知りませんが。

19 エリヤ彼に爾の子を我に授せと言いて之をその懷より取り之を己の居る樓に抱えのぼりて己の床に臥しめ、<sup>20</sup> エホバに呼ばわりていいけるは、吾神エホバよ爾はまた吾とともに宿るやもめに災をくだしてその子を死なしめたもうやと。<sup>21</sup> 而して三度身を伸ばしてその子の上に伏しエホバに呼ばわりて言う、わが神エホバ願くはこの子の魂を中に帰らしめたまえと。

「また中に帰らせて、これを甦らせてください。魂がもぬけのからになっているから、また魂を入れてください」

と、非常にもしろいことが書いてあります。これが三度と。「三度」とか「七度」ということがよく出てきますが、これは本当にそういうようにするんでしょう。子の上に伏してする。これは同じようなことを今度はエリシヤがやりますけれども。

<sup>22</sup> エホバ、エリヤの声を聴きいれたまいしかば、その子の魂中にかえりて生

きたり。」(列王記略上17・1、22)

とあるでしょ。

即ち、甦りの復活の事実は既にエリヤが、それからまた後でみますけれども、エリシヤがやっているんです。そういう甦りの事実がもう既に、死から甦らせる事実が旧約において、預言者を通してエホバの力が働いてあったということは、やはり忘れることができないわけです。使徒たちも、キリストの直弟子たちも旧約のことを知っていれば、それはキリストの復活なんていうことはすぐ信じられたはずなんでしょう、まあ、そこが非常に愚かなわけです。

そういうことで、実は私はずっと旧約を読んでいるものだから、こういうことに今度は気がついた。もちろん、前に一遍やったけれども、ちょっと忘れかけていたわけです。

● エリシヤの骨にふるふるや生きかえりて起きあがり

今度は、エリシヤの場合をみます。列王記略下の4章の始めのところに、

「少しの油しかなくて何も上げられない」

と言ったら、

「たくさん器を借りてこい。そして、その器に油を少しづつ注げ」

と言ったら、その油がすっかり満ちてしまったということが書いてある。エリヤの場合以上のことが出てくる。これはオリーブの油ですけれども、我々にとつても聖霊が本當にくだってくると、これは限りなく展開しますから。聖霊の油というものは人から人へとどんどん伝わっていきますからね。そういう意味においても、非常に大事な記事です。

それで、死人を生かしたことは、32節あたりから、

「<sup>32</sup> エリシヤここにおいて家に入りて視るに子は死にておのれの臥床の上に臥



してあれば、<sup>33</sup>すなわち入り戸をとじて二人内におりてエホバに祈り、<sup>34</sup>而してエリシヤ上りて子の上に伏し己が口をその口におのが目をその目に己が手をその手の上にあて身をもてその子を掩<sup>おおい</sup>しに子の身体ようやく温まり来たる。<sup>35</sup>かくしてエリシヤかえり来て家の内に其処此処とあゆみおりまたのぼり身をもて子をおおいしに子七度噓<sup>くさめ</sup>して目をひらきしかば、云々」(列王記略下4・32～35)

と。そして、これは生き返ってしまった。そういう復活をエリシヤもやっている。

それから、一番驚くべき記事は列王記略下13章20節からです。たぐさんのカリスマ的な働きをしたエリシヤが、

「<sup>20</sup>エリシヤ終<sup>つひ</sup>に死にたればこれを葬りしが年の立ちかえるに及びて

もう年が経つてですね。その当時の葬りは火葬ではないですよ、土葬ですからね。大体、白骨までなってしまうんだよな。

モアブの賊党国にいりきたれり。<sup>21</sup>時に一箇<sup>ひとり</sup>の人を葬らんとする者ありしが賊党を見たればその人をエリシヤの墓におし入れけるにその人いりてエリシヤの骨にふるるや生きかえりて起<sup>た</sup>ちあがり。」(列王記略下13・20～21)

という。死んだエリシヤが、白骨のエリシヤが人を甦<sup>よみがえ</sup>らせた。こないだこれを読んでいて、こんな驚くべきことは、私はもうおつたまげた。うっかりしてたね、これ。霊骨です。

「霊骨」

という言葉は、佐久間象山が使つて、吉田松陰のことを「霊骨」と言つた言葉があるんです。この霊骨というのは骨という意味ではなくて、吉田松陰のような人物を霊骨とって、本当に霊的な骨の人間だという意味です。

ところが、この場合は骨が霊骨なんだ。そいつに触れたらば、死んだ人が甦<sup>よみがえ</sup>つてしまった。エゼキエル書37章に骨がだんだん一緒になつて、とうとう肉ができて、皮ができて、人に甦<sup>よみがえ</sup>つたという霊的な幻のことをエゼキエルが見させられた。あれはイスラエルの復活のことですけれども、こういう驚くべきことがあった。

### ●キリストの甦<sup>よみがえ</sup>りは極めて当然

即ち、復活というのは実は、本来持つているところの神さまの、いただいているところの神さまの霊的な生命——霊生ですね——霊生があれば、人間は決して死なない。だから、キリストというのは霊的な人物ですから、肉を持つていても。だから、

「我を信する者は死すとも死なず」

とキリストが言われたのは、

「死んでも死なないんだぞ」

ということは、本当にキリストの霊生は聖霊によつて受けとるんですから。だから、キリ



ストから来る霊が本当の聖霊なんです。我々は本当に聖霊をうちに宿せば、死んでも死なないわけです。お葬式なんていつても、そんな湿っぽくやる必要はないのでね、

「ハレルヤ、アーメン!」

でいいわけです。ブラウニングが、

「私が死んだら歓呼してくれ。そして、勇ましく進んで行け」

と、素晴らしい辞世を歌っていますけれども。

だから、キリストの魅りは極めて当然なことなので、

「どんな事実があったか?」

と、昔から学者がいろんなことを言うが、そんなことは一つも要らん。もう当然な話なんだ。十字架の大業を、贖罪の大業を終われば、キリストはもう魅らざるを得ない。これほどはつきりしたことはない。

もし、それがなければ、世界は本当に闇である。神さまの創造は完全に失敗である。ところが、神さまの創造は完成にむかつて素晴らしい勢いをもって進んでいる。それを混沌とさせているのは人間の罪だけの話。だから、

「立ち帰れ、立ち帰れ」

と言っておられる。いかなる時も遅いことはない。死ぬ瞬間に、一方の盗賊はキリストに立ち帰ったが、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と。彼はパラダイスにいきなり魅らされてしまった。あれもそうだよ、パラダイスに魅らされてしまった。

そういうことですので、このエリシャのこの記事をみて、私は驚き喜んだ。こういう素晴らしいことがあったかと。白骨がそいつに触れたら、死人が魅ったなんて。普通だったら、笑うでしょうね。まあ、普通の人はとても信じないです。私はもうはつきり平伏します、こういう事実には。

神の生命というものは——もともと我々は永遠の生命の質を持って生まれている。ただ霊魂が不滅なんていうことを言っているのではない——生命そのものが滅びない。この神との間の、キリストを通しての連なりがなくなったら、これは危ない。そうしたら、地獄に、サタンに行く。神の愛というのは、サタンに取られたら大変だというので、

「エールカンナー」「妬みの神」

というのは、サタンに取られることを妬むほどに愛したもう神ということだからね。

●わが霊を受けよ

キリストはもちろん、十字架を通って我々を贖罪して、自我から解放してくださった。これがまた、言葉ではない。事実だから。この事実はもう、



「受けとるか、受けとらないか」  
であって、

「分かるか、分からないか」  
ではない。「信ずるか」でもない。「受けとるか」なんです。

「その現実を身体で受けとるか」  
ということ。私は「信ずる」なんていう言葉よりも、「体受」と言いたい。

「贖罪という事実を全存在で受けとりなさい。もう、過去・現在・未来の人間小池  
という罪びとは全部贖いとられていてから、問題はない。相対的なことがどうで  
あろうと、そんなことはどうでもいい。その奥の世界は、お前は贖われている」

と。そこを本当に受けとったら、もうこれは、聖霊は来ざるを得ない。グーツと、もの凄  
い力で。

「聖霊とは何ですか？」

もヘツタクレもありはしないですよ。本当に十字架を受けとってごらん。もう御霊に、倒  
されるから。

「わが霊を受けよ」

と。永遠の生がやってくるから。もう死んでも死なないんです、この霊生は。

私は正直、ほとんどこの三日間は食べてないですよ。だけれども、ちつとも衰えないです、  
気持は、肉体的にも。霊生というのは、神さまの生命というのはそんな素晴らしいものだから。  
甦りの生命です。キリストが、

「私は絶対に死なない」

と。ただ、贖罪の死を、イザヤ書53章を受けとった。地上ではイザヤ書35章を展開してい  
たキリストである。天国を現じつつ、病める者を癒し、苦しめる者に福音を宣べ伝え、魂  
を喜ばせ、死人を甦えらせ、らい病人を清め、天界をイザヤ書35章を完全に地上で現象し  
ておられた。

「やがて来る新天新地はこれよりもっと素晴らしいんだ」

という、あの新天新地の徴だからね、あのキリストの地上のご生涯は。「聖書研究」なんて  
要らんですよ。いいですか。本当に身体で読んでください。そうしたらもう、本当の権威  
がくるから。もう聖書が楽しくてしょうがない。

「聖書は文字ではなかった。ナザレのイエスに負けた」

と、ナポレオンが最後に告白したでしょ。

即ち、35章を展開した。それはイザヤ書53章の贖罪を十字架でやったら、35章の聖霊の  
現実を展開した。だから、53と35とはおもしろい数だなと思った。イザヤ書は特にキリス  
トが愛読された。



●(詩) 復活の力  
 それで、私はこないだから楽しくなつてしまつたからさ、4月12日の夜から13日の明け方にかけて、27節にわたる「復活の力」という讃美歌をつくつた。それを紹介します。

召団讃歌A 54 「復活の力」

(1987年4月12日作 讃美歌384「我こそ十字架の」の歌調)

- |    |  |  |
|----|--|--|
| 1  | エノクはメトセラ                                       | 生みしのちに                                     |
|    | 三百年間   | 神と共に歩む                                     |
| 2  | エノクはみ神に  | 伴 <small>つ</small> れられたり                   |
|    | 死を見ずこの世に                                       | 居らずなれり                                     |
| 3  | エリヤは死にたる                                       | 子に三つたび                                     |
|    | おのが身合はせて                                       | よみがへらす                                     |
| 4  | エリヤはバアルの                                       | 預言者らと                                      |
|    | 神の火求めて   | 祈り勝てり                                      |
| 5  | エリヤは火の人  | ヨルダンにて                                     |
|    | 火車火の馬  | 現はれたり                                      |
| 6  | エリヤは炎の   | 風に乗りて                                      |
|    | み空の彼方に   | 飛び去りたり                                     |
| 7  | エリヤの分身   | 神の人よ                                       |
|    | エリシャは死にたる                                      | 子を憐れむ                                      |
| 8  | 身を子に合はする                                       | 七度びにて                                      |
|    | 子は甦 <small>よみが</small> へりぬ                     | あなうれしや                                     |
| 9  | エリシャは死にたり                                      | 神の人よ                                       |
|    | エリシャのむくろは                                      | 白き骨よ                                       |
| 10 | エリシャの墓場に                                       | 他人 <small>ひと</small> の屍 <small>かばね</small> |
|    | 投げ入れられたり                                       | 誰か知らん                                      |
| 11 | エリシャの白骨  | その屍 <small>よみが</small> に                   |
|    | 触 <small>ふ</small> るるや屍 <small>よみが</small> を   | 甦 <small>よみが</small> へらす!                  |
| 12 | 噫! 神の人は  | 死にて死なず                                     |
|    | 生命の霊骨  | 靈 <small>く</small> すしきかな!                  |
| 13 | エホバに呼ばれて                                       | エゼキエルは                                     |
|    | 霊 <small>こころ</small> にて枯骨 <small>こころ</small> の | 谷を見たり                                      |
| 14 | 枯骨 <small>こころ</small> に預言す                     | 見よ枯骨 <small>こころ</small> に                  |
|    | 骨肉生じて  | よみがへりぬ                                     |



15 ヤイ口の娘が 今いまはの際きわ

16 イエスは途みちにて 按手みてを求む

17 ヤイ口の娘は 十二年も 癒いやし給ふ

18 人々泣きおる 希望絶えて すでに死せり

19 「乙女よ起きよー」の 憐あわれみ叫べり 「タリタ・クミ」と 此のみ声に

20 ナインの寡婦やもめの 独子ひとりご死す 伊エス出遭あふ

21 イエスは憐あわれみ 「泣くな母よ」 伊エス出遭あふ

22 「若者起きよー」と 若者直ちに 甦おき給へり

え、葬式の行列だぜ。その柩こに置いたんだ。そうしたら、どうですか。 柩の中から動きだした。だから、簡単に火葬にできないね(笑)。私も起き上がってくるか もしれない。

23 マルタとマリヤの 情なさけけ深く

24 死の後三日みっひも 経へにしラザロ 主は叫べり

25 言下にラザロは 出で来たれり

みんな、キリストは叫んでいるんですよ。いい加減な声ではないですよ、これ。

26 主イエスはゴルゴタで 十字架にて 幕は裂けぬ

27 雄叫おたけび給へば 霊震あり

28 岩なるみ墓あしたの 主の軀むくろは 甦おき給へり

29 三日目の晨あしたに 主イエスの聖言みことば 復活よみがえりなるぞで 「我は生命いのち」

ハレルヤ アーメン



30 エン・クリストにて 死を乗り越えん

十字架・聖霊 めぐみ尽きず

そういう讃美歌です。ヤイロの娘とか、ナインの寡婦の子とか、ラザロのことはみな著作集第一巻に詳しく書いてありますから、どうぞ、また読み返してください。今日は、そのところのお話は略しましたけれども。

### ●死は乗り越えられた事実

特に今日は、旧約の方に重点を置いてお話したわけです。しかし、このキリスト以前に既にそれだけの驚くべきことが起きているので、いわんや我々がキリストに在ってこの生命を受けとったならば、これは本当に死んでも死なない。もう、死というものは、そういうことでもって我々にとつては乗り越えられた事実としていよいよ受けとつていきたいと、こう思うわけです。

そうすると、もう毎日が本当にはりが出てくる。まあ、いろいろ人間の様子には、調子が変わるかったりいろんなことがありますよ。心の調子だの、あるいは身体の調子だの。しかし、いつもこのキリストの生命の中に、

「我は生命なり、復活なり」

という、この中に自分を本当に投げ入れて、そして、もうそのこと自身がすぐに祈りであり、すぐに受けとると、現実であるということを我々は体験し、体現していかなかったら、つまらないですよ。それをまた今度は、人に分かつたざるをえない。それが本当の伝道です。誰でもがそのような伝道をせざるを得なくなる。

パウロがロマ書8章で、

「<sup>9</sup>然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。<sup>10</sup>若しキリスト汝らに在さば<sup>からだ</sup>体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。

<sup>11</sup>若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき<sup>からだ</sup>体をも活かし給わん。」(ロマ8:9-11)

という。これは決定的な言葉です、パウロのこの言葉は。特にこのロマ書8章11節は今日の新約の大事な言葉として受けとつてください。

「若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、

「若し」ではない、これは。

「我々のうちに宿っていらつしゃっているから」

と、現実に読みたい。宿り給うがゆえに、



キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体からだをも活かし給わん。」

このことはもう死を乗り越えた、さすがはパウロですね。だから、

「この甦りがなかったら、我々の信仰は空しい」

と、コリント前書15章でさんざんパウロが言っているとおりです。

まあ、福音は盛んなるものです。絶対にへこたれてはいかん。いろんなことに遭えば遭うほど、逆に聖霊が力を働かせます。逆比例する。あまり順風だと、聖霊をお留守にしてしまつてとんでもない。いろんなことにでつくわせば、行き詰まらないですよ、絶対に。逆に力が来るんだから、ありがたいではないですか。こんなことは他にありはしない。それが本当のキリスト者だということ。

### ●キリストの復活は熾んなる霊生の顕現

だから、私は

「新宗教改革」

と言わざるを得ない。何も私は自分で新宗教改革をするなんて言っているのではないですよ。聖書が私たちにそう呼びかけているんだから。我々一人びとりが、

「もう、マルチン・ルターだとか、内村鑑三だとかしよつちゅう言っているな。進んで行け。キリスト直結で行け」

と、こういうわけです。3月になると、「内村鑑三記念講演会」をしよつちゅうやっているわ。なにもけなすわけではないけれども。私は内村先生を内村先生としては尊敬しているよ。けれども、今度の第九卷（『感想と紀行』1987年5月刊）にも書いてある。

「噫、内村鑑三」

という文章があるよ。

「先生は素晴らしくなされた。しかし、一点惜しかった」

と書いてある。これは聖霊のことです。先生には聖霊の火花は散っているんだけど、何といつても使徒的な次元からはズレた。それで、我々は、皆さんはお一人びとり、この使徒たちの次元、預言者たちの次元に誰でもが入れれる。無条件に。一つも条件はいらん。

どうぞ、そういうことで、キリストの復活は熾んなる霊生の顕現であつて、いわゆる復活ではないんだよな。熾んなる霊の生命の顕現、顕れである。だから、墓の中から甦ったら、岩盤がひっくり返つてしまつて、ローマの兵士があわてて逃げてしまった。

神を、一切とする人は、己の自由よに死ぬ、人は本当の自由よを持っている。今は世の中で、

「自由、自由」

なんて言っているが、「何が自由か」と言いたくなる。いろいろ癪にさわるのがたくさんある。いいよ、そんなことはどうだつて。こっちは本当に勝っているんだから。皆さん、



いろんなことがあるでしょう、今の世の中には。構やしないよ、そんなものは。

著作集の第九巻はこの5月に出版しますが、九巻もあるていどおもしろいですが、第十巻は大変なのができますから。第一巻（『無者キリスト』1975年刊）と第二巻（『無の神学』1982年刊）と第十巻（『聖書は大ドラマである』1988年刊）が、これが始めと中と終りというわけです。

特に第十巻はもう総合的です。これはみな書き下ろしですから、今度は。もうこれで私は明け暮れているんです、十巻で。聖書の365か所を選んで、全部自分の訳です、旧約も新約も。靈感でもって書いてますから。しかも、これを読めば、聖書を知らない人も聖書の神髄が分かる。

だから、これはどうしても普及版でもって日本全国に読者を持ちたいと思うから、どこかの大きな出版社から出したいと思う。もちろん、この第十巻としては出しますけれどもね。また、しかし、私の文章は漢字が多いので困るんだけど。漢字を粗末にしてはダメだよ。よくふりがなをしておきますから。世界最高の文字だよ、漢字は。感じがいいんだ、大変（笑）。楽しかったね、この復活節は。そういうわけで、あなた方は大丈夫だよ、ひとつも心配はいらん。今日、新しくいらっしやった方も非常に素晴らしい集会にお出になってよかったですよね。やっぱり来るものだ。あとは話し足りないのは、祈祷会のとくにやりますから。一応これで午前の集会はおしまい。

